佐久良家の日常

ポルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

佐久良家の日常

【Ｎコード】

Ｎ０４４１Ｈ

【作者名】

ポルナ

【あらすじ】

「佐久良佑樹」は忙しい親のかわりに家事をほとんど一人でこなす中学生。そんな彼と、その周りの人々とのほのぼの日常生活を描きます。

1：眠い日（前書き）

初投稿です。日常生活を面白おかしく書けたらいいなと思っています。本当にひまな時に読んでいただけたら嬉しいです。

（今回の登場人物）

「佐久良佑樹（さくらゆうき）」

中学二年生。

親の仕事が忙しいので家事をほとんど担当。　妹の舞と一緒にいることが多いので年下の面倒見が良い。

学校の成績は中くらいで、運動神経はあまりよくない。あと、意外と寂しがり屋である。　趣味：料理、寝ること　特技：趣味に同じ。あと、中途半端にいろいろ得意。

「佐久良　舞（さくらまい）」

佑樹の妹で、小学2年。一緒にいることが多いので、兄になついている。活発で、兄と違って運動神経が良い。

友達が多く、いつも元気に外で一緒に遊んでいるが、寂しがる（そぶりはみせないが）兄のために一緒にいる時間を必ず作っている。　特技：スポーツ全般　好きな食べ物：兄のつくるものは何でも

1：眠い日

僕の名前は
「佐久良佑樹」。

今日から中学二年生になった。

始業式だったので今日は午前で学校は終わり、
今は家の茶の間でのんびりしている。

「お兄ちゃん、」

「……ふぁ？」

うとうとと寝そうになっていたところいきなり話しかけられたので、
間の抜けた返事をしてしまった。……不覚。

僕のことをお兄ちゃんと呼ぶのは妹の
「舞」。小学二年生だ。
舞も今日は始業式で、僕よりも早く帰っていた。

「お腹すいたー」

「はいはい、じゃお昼にしよっか。何食べたい？」

「んと……チャーハン！」

「かしこまりましたー、と。」

僕たちの両親はどちらも日曜は休みだけど、平日は朝は早く、夜も遅い。だから家事は僕たち兄妹（といってもほとんど僕）がやってる。

だから料理をするのはいつものこと。チャーハンなんて朝飯前だ。

……でも今はランチ。

んーと、昼飯前だね。

「さ。できたよ、舞。　お皿準備してー」

「はーい」

「「いただきまーす」」

……もぐもぐ。

うん、なかなかいい感じのできかな。

家の食事を作るようになって長いので、自然と味を気にしながら作るようになっている。

「おいしー。お兄ちゃんってやっぱり将来いいお嫁さんになれるよ」

「ん、ありがと。」

いまの舞のセリフには突っ込みどころはいろいろとあるが、料理を作る者としてはやはり

「美味しい」と言われると嬉しいのでつっこむ前にそう言ってしま

った。

…てゆうかそんなセリフどこで覚えたんだこの子は。

「「ごちそうさまでした―」」

食べ終わり、今度は二人で洗いもの。

「ねぇ、お兄ちゃん」

「何？」

「どうしてさっき

「僕は女じゃないよ」っていわなかったの？」

「知ってて言ってたのかよ！？」

「えへへー、すごいでしょ」

ほめてないしちっとも凄くねぇよ。……ただ単に言ってみたかっただけなのか？

洗いものが終わり、再び茶の間へ。

今日はとてもあたたかくて、お昼の後ということもあるがすごく眠たい。

このまま夕飯の準備まで寝てしまおうかな……

「……お兄ちゃん、ヒマだよー」

……と思ったが無理だった。

「なんかしてあそぼー」

「友達と遊ばないの？」

「今日はやくそくしてない。だからお兄ちゃんであそぶー」

……お兄ちゃん

「で」！？

「まちがえた―。お兄ちゃん

「と」。」

ホントかよ。

「わかったよ。じゃあ何する？…言っとくけど僕は舞みたいに運動は得意じゃないから、激しい遊びはパスだぞ」

「じゃあ家でできるあそび？うーん、……

じゃ、しりとり！」

しりとりか。こういうのは言葉のレパートリーが多い年上の僕のほ

うが有利になってしまうが、手加減してやればいっか。…このまま茶の間で座りながらできるし。

「おっけー、じゃしりとりの
「り」からね。舞からどーぞ」

「りんご！」

「ごりら」

「…らっぱ！」

「パセリ」

「りんご！」

「…同じ言葉二回言っちゃダメなのしってる？」
「りんごダメなの？」

「うん、他のにして」

「じゃあ……りす！」

～十分後～

「…メダカ！」（舞）

「からす」（僕）

「…スイカ！」

「貝」「…いか！」

「からし」

「…しか！」

「かいたくち」

「ちか！」

「かもめ」

「メカ！」

そういえばさっきから

「か」ばっかりだな。

……わざとか？

じゃあもしかして

「み」にしたら…

「かみ」

「みか……！」

……このままだと

「みかん」になってしまうことに気づいたようだ。

さぁどうする。

「…みかちゃん！！」

「それも

「ん」じゃん」

「あっ！しまった！」

気づいてなかったのかよ！

ちなみに

「みかちゃん」という人名はダメだと言われるかもしれないが、

たしか昔おもちゃの人形にあったよね。そんなの。

……ってあれれ？

「リカちゃん」だったっけ？

まぁいっか。

「まけたー」

「そだね。今日は僕の勝ち」

でも十分以上続いたから頑張った方かな。

「もいっかいー」

「はいはい」

…それにしても寝むい。
寝ていたいな。
ねて……

「…くー」

寝てるしコイツ！！

「すぴー…」

舞はいつの間にか座ったまま寝ていた。

「あいかわらず早いな…」
即寝対決したら誰も勝てないんじゃないか？

あ、の●太くんには負けるか。

……さて、と。

僕も夕飯の準備まで寝るかな。

（5秒後）
「くー…」

……結局僕も舞に負けないほど寝るのが早いのだった。

そんな平和な1日でした。

1：眠い日（後書き）

だんだんと登場人物や笑いの要素を増やしていければと思っています。

2：朝の過ごし方（前書き）

朝はいつもこんな感じということで話を書きます。

2：朝の過ごし方

「ふわぁ～～ぁ……」
……朝か。

おはようございます。
佑樹です。

「すぴー…」

それにしても……

「……なんでコイツは僕の布団の中にいるんだ」
目覚めてみると舞が気持ち良さそうに僕の布団で寝ていた。

舞はまだ小さいので僕たちは一緒の部屋で寝てるのだが、布団までは一緒じゃない。

となりでは舞がいなくなってさみしそうにしている布団がある。

「まぁいっか。ほっとこ」朝食を作るために起き上がる。

今はちょうど6時。
舞は朝食ができるまで寝かせることにしているので、僕は目覚まし時計なしで起きられる。

～10分後～

「よし、できた」

今日の朝ご飯はご飯、ワカメと豆腐のみそ汁、トマトとレタスのサラダと、目玉焼きだ。

全部簡単にできるもの。

……だって朝に面倒なのつくりたくないじゃん。

ちなみに朝食は和食派なのでご飯とみそ汁は毎日のこと。これだけでも体のスイッチが入るっていうしね。

「さて、あの寝ぼすけを起こしに行くか。」

寝室の障子戸を開ける。すると、ちょうど朝日がいまだに僕の布団で寝ている舞に当たる。

……まぁこんなので起きるわけではないが。

ぺしぺし。

「おーい、舞ー」

ほっぺたを軽くはたく。

「すやすや……」

「朝だよ、起きろー」

ほっぺたを引っ張る。

「ぐぅぐぅ……」

「起きろっての―」
そのまま回転を加える！
「……ふにゃ？」
……やっと起きた。
「ふわぁ～～ぁ…、おはようお兄ちゃん」
「うん、おはよ。もう朝ご飯出来てるからすぐ着替えておいで。」
「は～い」
舞は返事をして起き上がろうとしたところで……
「ぱたん」
……また寝た。
「うぉいっ！？寝るな！」
せっかく起こしたのに。
「すぴ―…」
……結局2度寝に突入した舞はまた起きるのに10分はかかるのだった。
「「いただきま―す」」

さぁやっと朝食だ。
舞が2度寝したせいで
ちょっと冷めてしまったが、味に問題はない。

「ところで、舞」

「ん？」

「昨日始業式だったけど、担任の先生だれになった？」

「今年も吉田先生だよ！」

「そっか、良かったね。」

……吉田先生は僕が5、6年の時にならった人で、いつもギターを持っているのが特徴。ちょっとおもしろくて、優しい先生だ。

あと、サッカーが大好きで、昼休み時間があれば必ず生徒たちと遊んでいた。

……運動が苦手だった僕も、吉田先生とするサッカーだけは好きだったな……

「お兄ちゃん、どしたの、ぼーっとして」

「あっ、ごめんごめん。ちょっといろいろ思い出してた。」

……今度の運動会にでも会いに行こうかな。

「それでね、今お昼休みサッカーで

「おーばーへっどきっく」ってゆうの一緒に練習してるの」

「オーバーヘッド！？」

……小２（しかも女の子）になにやらせてんだ、あの人は。

……。

「「ごちそうさまでしたー」」

「お腹いっぱいー」

うん、朝ご飯をしっかり食べれるってことはいいことだよね。

「舞、今日の準備は出来てる？」

「うん、だいじょうぶ」

「じゃあ一緒に片付けるよ」

「はーい」

……舞はまだちっちゃいので踏み台をつかって洗い物をする。

「早く背たかくなりたいなー」

「焦らなくても、舞はしっかり食べてるからすぐおっきくなるよ。」

……片付けが終わり、学校へ行く準備をする。

今は7時。まだ出かけるには早いので、（舞は）7時半まで茶の間でのんびり。

……今日はいい天気なので僕は洗濯物を外に干してからのんびり。

そして舞がまず出かける。
去年までは集団登校の集合場所まで一緒に行ってやっていたが、
「もう2年生だからだいじょうぶ！」ということで昨日から一人で行くことになった。

「行ってきまーす」

「行ってらっしゃい。気をつけてな」

……舞を見送った後、
火元や戸締まりを確認。
「よし、行くか」

さぁ、今日もがんばろ。

2：朝の過ごし方（後書き）

読んでいただきありがとうございます。次からは学校でのはなしなので、キャラが結構増えるかもです。

舞の視点での話も書こうかなとも思っています。

3：幼なじみと登校（前書き）

（この話で初めて登場する人物）

「米倉　佐樹　（よねくらさき）」

佐樹の幼なじみで、活発で明るい性格の女の子。名前が佑樹と対象的なので兄妹に間違われることがあるが、これは単なる偶然である。

部活は陸上部に所属。県内で1、2位を争そうほどの長距離の選手である。

3：幼なじみと登校

「おっはよ！佑樹！」

「おはよ、佐樹。」

「さぁ、がっこ行くよ！」

この子は僕の幼なじみの
「米倉(よねくら)佐樹」。

僕らの家の向かいに住んでいる。

小さい頃からよく一緒に遊んだりしていたが、今は一緒に登校する仲だ。（学校でも一緒にいることが多いが）

「よし、行くか。」

「今日も学校まで競争ね」

「ええっ！？また！？」

「うん、また」

「ええー…もう佐樹の勝ちでいいよ―」

「いやいや、佑樹は日頃運動不足だからこういう時にやっとかない

と」

僕たちの村の中学校は山のなかにあるので、山道を自転車で登って行かなければならない。

そこを全速力なんて……

「朝から体力使い果たしてしまうじゃないか！」

「問答無用！負けたら今日の給食のデザートわたしのだからね！」

……え！？

今日の給食のデザート……！？

「僕の好物、桜もちじゃないかぁぁぁぁぁ！！」

猛ダッシュ。

「うそっ！？速っ！！」

「ぬおぉぉぉぉぉぉ！！」

……僕はロードレーサーも顔負けのスピードで佐樹をぶっちぎり、見事桜もちを死守したのだった（そして燃え尽きた）。

～2分後～

佐樹がゴール。

「はぁ、はぁ……佑樹がこんなに速かったなんて……はぁ、……今まで負けたことなんか、なかったのに……」

「食べ物のちからだね」

「なるほど。よく覚えておくわ。……ふぅ。悔しいけど、わたしの負けだから今日のデザートあげる。……それにしても疲れた…」

「いや、僕は自分の分がありさえすればいいから、別にいいよ。……そのかわり、その、もう競争すんの止めないか？」

……疲れるから。ホントしゃれなんないから。

「うん、もうしないわ……」

～教室（誰もいない）～

ここは2の1教室。……といっても人数が少ないので1クラスしかないが。

「それにしても早く着き過ぎた……」

今は7時４０分。
いつもは３０分かかるところ１０分で着いてしまったので朝学活までかなりの時間がある。

「……ヒマだね」

「……ヒマね。」

「誰もいないしね」

「……2人っきりよね」

……だからどうした。

「そうだ。こんな時は図書室にでも行って時間をつぶそう」

「そうしよっか」

～図書室にて～

「久しぶりだなー、ここきたの」

「わたしなんか夏休みの読書感想文かくための本借りにきた以来だわ」

「僕は冬休み前に料理の本を借りた以来だ」

「えっ、佑樹そんなの借りてたの？」

「うん。……ああ、これこれ。結構参考になったから冬休みでだいぶ料理のレパートリーがふえたよ。」

「さすがね……佑樹は将来いいお嫁さんになれるよ」

…どっかの誰かさんと同じこと言ったよ！？

「あ、…ありがとう」
そしてまた
「ありがとう」とか言っちゃったよ僕！？つっこめよ！！

「……あ、見て見て佑樹、ギネスブックだって」

……その後、朝学活までギネスブックの写真やら記録やらを見て時間をつぶしたのだった。

3：幼なじみと登校（後書き）

1話に一気に新しい登場人物を出すとごっちゃになるので、ひとりずつにしました。　　そしてまだ授業が始まりません。…ちょっとゆっくりしすぎかも！？

４：イングリッシュ・タイム（前書き）

（今回初めて登場する人物）

「佐藤　友美　（さとうともみ）」

佑樹の担任で、英語の先生。まだ２０代。おっとりしていて、優しい性格。たまに、人の心の中を読んだり（？）するので、不思議な雰囲気が醸し出されている。

4：イングリッシュ・タイム

こんにちは。

引き続きまして佑樹です。

「きりーつ」

「気をつけ」

「礼っ」

「「「おはようございまーす」」」

やっと朝学活が始まった。

「はい、おはようございます。じゃあ今日の連絡をしますね。明日の入学式の会場の準備があるので、今日は午前のみの授業です。会場作りのお仕事ですが、二年生は……」

この先生は

「佐藤　友美」先生。二年生の担任で教科は英語だ。

全校の人数がすくないので、英語の先生はこの人しかいない。

「……とゆうことなので、よろしくお願いします。はい、今日の

連絡は以上です。……一限は英語でしたね、じゃあ授業の準備に入ってください。終わります」

「きりーつ」

「気をつけ」

「礼っ」

「「「ありがとうございましたー」」」

さぁ、授業だ。頑張るぞ（寝ないように）。

僕は英語はまだ得意なほうなので、予習もしてあるし、かけられても大丈夫だろう。

「ねぇ、佑樹。今日の英語、新しいＡＬＴの先生くるみたいだよ。」

「えっ、そうなの？」

……ＡＬＴとは

「アシスタントラングエッジティーチャー」のことで、外国語の授業の補佐をする人だ。

ちなみに昔はＡＥＴ（アシスタントイングリッシュティーチャー）だったらしい。

「英語で会話したりすんのかな」

「たぶんね」

「きーんこーんかーんこーん」（あいさつ省略）

「はい、じゃあ授業を始めます。初めに、今日はＡＬＴの先生に来ていただいているので、紹介します。」

「どんな人なんだろ…？」

「何人かしら……？」

教室がざわつく。

「では、お入りください」

「オゥケイ、アィウィルゴゥ」

ガラッ。

僕たちは、そのＡＬＴを迎えた。

そして……叫んだ。

「「「えええぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？？？」」」

……信じられない。

なんと……ギターを持って教室に入ってきたのは、吉田先生（第2話参照）だったのだ。

なんでここにいるのこの人！？場違いでしょ！？

「どうも、ミスターよしだです」

「「「知ってるわ！！そんなこと！！」」」

「とにかく、ＡＬＴとして来ました。ヨロシク」

「なんで吉田先生がＡＬＴなの？」

「英語ペラペラだから」

……初耳だよ。

「外人じゃなくてもいいの？」

「だいじょうぶ、先生3年間くらいアメリカで暮らしてたことあるから」

……それも初耳だよ。

てゆうかそんなんでいいもんなの？

「いいもんなんです」

……さらっと心の中読むなよ友美先生！！

「あくまでＡＬＴは英語の授業の補佐なので、外国の方でなくてもいいんです。」

……ホントにいいの？

てゆうか小学校は？舞のクラスは？

「心配するな！小学校の私のクラスなら他の先生にまかせてある！」

……この人も僕の心の中読むし！

「……それにしても久しぶりだなぁみんな。元気か？ハゥ・アー・ユウ？」

「はい、元気です！」

「ホント久しぶりですねー」

「先生は元気？」

「ねぇ、先生！久しぶりにギター弾いてよ」

……みんな吉田先生のことが好きだったので、なんだかんだ言って嬉しそうだ。

「おいおい、今は英語の授業だぞ。スピークイングリッシュ、エブリワン。アイ・キャント・アンダースタンド・ジャパニーズ。オゥケイ？」

「「「すげー。発音いいー」」」

吉田先生がこんなに英語が出来るなんて。

「オーケー、ファースト、レッツプレイ　ア　ゲイム。」

吉田先生の説明と、友美先生の通訳（必要性を感じないが）によってあるゲームの説明が行われた。

「ドゥーユゥーアンダースタン？……レッツスタート！」

みんなには大きくテーブルが描かれている1枚の紙が配られた。

吉田先生が、自分の持っている絵を英語で説明し、僕たちがそれを

聞いて、紙のテーブルにものをかいていって……

そして、最終的に1番吉田先生の絵に近かった人が勝ち、
……というゲームだ。

さぁ、僕の英語を聞き取る力がためされるぞ。

「ファースト。ア・キャット・ドールイズ・オン・ライトオブ・ザ・テイボゥ」

……えーと、
「テーブルの右側に猫のぬいぐるみがある」、かな。

かきかき。うわ、かわいくないなーこのぬいぐるみ。まぁいいや、次。

「ネクスト。スリーペンソゥズ・アール・スティッキング・イン・ザドールズ・ヘッド」

「鉛筆が三本ぬいぐるみの頭に刺さっている」!?

「か……かわいそうで描けないよ……」

でも描かないといけない。
……かきかき。ごめんね猫さん。

「ネクスト。ア・テイボゥクロック・イズ……」

こうして吉田先生の説明が続き、それぞれの絵が完成した。

「オゥケイ、ショウミーユアピクチャー、プリーズ」

「…はい、じゃあみんなが書いた絵と吉田先生の絵を比べて見ます。」

みんなが出来た絵を友美先生に向ける。

さぁ、どうだ。なんか言うとおりに描いたらひどいことになったんだけど。

「えーと、いちばん一致しているのは……えっと、……佐久良くんのですね。」

「おぉ――――〜〜」パチパチパチパチ。

「えっ、僕？」

……僕の絵かなり下手なのに。

「はい、絵は決して上手いわけではありませんが、内容がほぼ一致しているので。」

……だから心の中を読むなっ！！

「他は～、時計の針が指す時間や、ものの大きさなど、細かいところでの違いがあって、おしい人がいっぱいいますね。」

「グレイト！ユウキ、コングレィションズ！」

「セ、センキュウ」

……その後、英語でのゲームは続き、楽しい時間を過ごした。

「あ、そろそろ終わりの時間ですね。」

「オゥケイ、ザッツオールフォアトゥデイ、スィーユーネクストタ～イム。」

「「「スィーユー！」」」

「きりーつ」

「気をつけ」

「礼っ」

「「「ありがとうございましたー」」」

結局最後まで英語ベラベラしゃべってたな……不自然にもほどがあるよ、あの先生……

「佑樹、

「スィーユーネクストタイム」って、またくる気なのね。吉田先生」

「……そうなのね。」

まぁ、久しぶりに会えて良かったな。

……さぁ、後の授業も頑張ろう。

4：イングリッシュ・タイム（後書き）

……第2話のはなしにだけ出てた吉田先生が登場したがってたのでこんなことになってしまいました。……普通はありえませんね。はい。

５：お料理のお手伝い（前書き）

ラグビー部の試合があったので更新がおそくなってしまいました。

さて、舞が初めて料理のお手伝いに挑戦する話です。

飽きずに読んでやってください。

5：お料理のお手伝い

こんにちは。またまた引き続きまして佑樹です。
その後、午前の授業が終わり、入学式の準備も意外と早く終わり、今はまさに帰ろうとしているところです。

「それじゃ、佐樹、部活頑張ってね」

「うん。……今日の夕飯、楽しみにしてるよ―」

「まかせとけっ」

今日は佐樹の親の帰りが遅いらしいので、夕飯を僕のところで食べることになっている。

さて、何を作ろうか。
帰って冷蔵庫と相談だ。

～１０分後～

「ただいま―」

帰りは完全に下り道なので、あっという間に到着。

「おかえりー」

舞はもう家に帰っていた。

「ねぇ、お兄ちゃん、今日吉田先生が――」

「あぁ、知ってるよ。一時間目いなかったんでしょ？」

「えっ。何で知ってるの」

「それは、……」

（説明中）

「……ということなのです。吉田先生言ってなかった？」

「うん。なんか

「私はちょっと用事があるので行ってくる」とか言って」

ちゃんと行き先を言えよ！

「そんなことより舞、今日も友達と遊ばないの？2日も遊びに行かないなんてめずらしいけど……」

「うん。でも今日は夕ごはんにサキお姉ちゃん来るでしょ？だから舞もてつだうの。」

「そっか、佐樹に誉めてもらいたいんだな。」

そうと決まればさっそく準備だ。

……まずは冷蔵庫の中身をチェック。

「野菜は……えっと、じゃがいもと、玉ねぎと、人参、あとはレタスとトマトも残ってるな。」

「お兄ちゃん、豚肉もあるよ。」

……となると作れるのは、カレーか。シチューか。あとは肉じゃがか。そんなとこかな。

どうしようか。

……肉じゃがは最近つくったよな。ということはシチューかカレー。粉は２つともある。

「舞、シチューかカレーにしようかと思うんだけど、どっちがいい？」

「んと……カレー！」

「そうだな。レタスとトマトがあるからサラダもできるしね。よし、作るぞ」

これくらいならサラダを合わせても３０分ちょっとで終わるだろう。

「舞もがんばるよ。何すればいい？お兄ちゃん」

「まず手を洗いなさい」

……ジャーーーッ。

「次は？」

「……手を拭きなさい」

……ふきふき。

「よし。次は？」

「そうだな。じゃあ最初の仕事。人参とじゃがいもの皮むきをしてもらおっか」

「わかった。よーし…」

……舞は引き出しから皮むき器を取り出すかと思いきや……

「シャキーン」

包丁を取り出した。

「「シャキーン」じゃないよ！！危ないだろ！皮むき器を使いなさいっ」

「ええー、舞も包丁使ってみたいの―。お兄ちゃんだっていっつも包丁で皮むきするのに」

「僕はそっちのほうが慣れてるからいいの。舞はまだ危ないからほら、皮むき器使って。」

「はーい、わかった―」

……素直でよろしい。

「でも、玉ねぎのみじん切りくらいだったら舞にもできるかな。」

「ホント！？やるやる！」

「……皮むき終わってからね。」

舞は張り切って人参の皮をむき始めた。

「わぁーむけるむける。楽し―」

さて、僕は豚肉を切るとしますか。

それにしても舞も楽しんでやってくれて、よかったなー。もっと早く手伝ってもらえばよかった。

でも舞は遊びが優先だよな。子どもはそれが一番。

……保護者か僕は。

「すごいすごーい」

人参の皮がみるみるうちにむかれていく。

みるみる……って、ん！？

「ちょっと！？舞、そこもう皮じゃない！！」

みるみる人参は細くなっていく。

「ストップ！！ストップ・プリーズ！！」

……舞がようやく止めた時には二本の人参がゲッソリしていた。可哀想に。

「わかる？舞、皮は表面だけ。だから一周すればそれで終わりでいいんだよ。」

「なーんだ。そ―だったのか」

ゲッソリ人参と合わせると分量的にもう一本必要だな。

「よし。じゃあもう一本やってみな」

「は―い」

むきむき……

「そうそう、ゆっくりね」

「……できた！！これでいい？」

「うん、オッケー。じゃ次じゃがいもいってみよ―」

「よしきたー」

じゃがいものほうは順調に終わり、次は玉ねぎとにんにくのみじん切りだ。

まずは玉ねぎ。でも皮むきからやらせたら

「むいてもむいても中身がない！？」ということになりかねない。

「皮をむいて……と、よし。じゃあ最初に真っ二つに切ってみようか」

…僕は包丁の持ち方、使い方を舞に説明した。

「……うん、わかった。よーし…」

……ストン。

「お、うまいうまい。」

「えへへ」

「次はみじん切りね。」

…僕はみじん切りのやりかたを教えるべく、手本を見せた

トントントン……

「わぁー。すごい」

「やってごらん」

「よっしゃー」

トントントン……

「うん、舞は包丁をあつかうのが意外と上手いなー。」

「えへん」

もう少し危なっかしくなるかと思ったけど、少し安心した。

トントントントントントントントントン……

「うわっ」

突然舞が目をおさえた。

「しみるー」

……やべっ、忘れてた。

「だいじょうぶか舞っ」

「しくしく……（／＿；）」

…僕は玉ねぎを切っても目にしみない技を伝授した。

「……こう？」

舞はティッシュを鼻に詰めて、割り箸を口にくわえている。

他から見ると
「なんだこいつ？」って感じだ。
玉ねぎを切った時に飛ぶものは目に直接行くのではなく、鼻から入るそうだ。
だから鼻にティッシュを詰めておけばある程度目にしみるのを防げる。
そして、割り箸をくわえて唾液を出すことによって目がしみる働きを抑えられるらしい。

「おぉ―、しみないしみない」

ダブルで効果はばつぐんのようだ。
……でも舞はまだ小さいから素直にやるけど、
ちょっと年頃の女の子だったら絶対拒否するよな。だって変だもん。
トントントントントントントントントントン……

「できた―」

「はい、よく出来ました」

ん？……そういえば僕、舞のこと見てるからさっきから何も出来てない！？
まぁ舞が料理を手伝うのは初めてだし、仕方ないか。

まだ夕飯まで時間もあるから、これからもゆっくり作っていくか。

「よーし、次はにんにくだ―」

……あれ!?

続くの??

5：お料理のお手伝い（後書き）

はい、すみません。続きます。

…小さい子に手伝わせると、よけいに時間かかることってありますよね。ところで玉ねぎを切ってて目にしみない方法まだあったと思うのですが、何だったでしょうか？

6：晩ごはん

こんばんは。佑樹です。
今は5時半。引き続き舞とカレーを作っています。
ちょうど僕は人参、じゃがいもを切り終わったところです。
「よし。みじん切りできたよー」
「お疲れ様、舞。こっからしばらくは僕がやるから、ちょっと休んでて」
鍋に油をしきながら言う。
「ううん、お兄ちゃんの見てる」
「そっか。じゃあ今度からやらせてあげるからね」
「うん！だから今は見てけんきゅうする」
…熱心でいいことだ。
「ボッ」
弱火にかけて玉ねぎとにんにくを炒める。
「ジュワ――――ッ」
それらがしんなりしてきたらコンソメ（固形）と水、そして豚肉、

人参、じゃがいもを加える。
そして火を中火に強める。
「ボーーーッ」
……沸騰するまで待つこと二分。
弱火に戻して野菜に火がとおるまで煮る。
「ぐつぐつ……」
そしていったん火を止め、カレー粉を割り入れる。
「パキパキッ……と、あとは五分煮込んでおわり。」
「すごーい」
テキパキと無駄無くこなしていることに舞は感心しているようだ。
「カレーは今まで何回も作ってるからね。」
それに分量も覚えているからすんなりいくはずである。
「……この間にサラダを盛り付けようかな。よし、舞。出番だよ」
「よーし」
「お皿にレタスを適当にちぎってしいて、そして僕が切るトマトを乗せてね」

「はーい」

舞もテキパキと仕事をこなす。意外と料理に向いてるかもなぁ。

……とトマトを切りながら思った。

「よし、できた。……ん―、でもなんかレタスとトマトだけじゃ足りないよね。」

「うん、確かに。……あっ！そうだ。たしかゆで卵残ってたからそれ乗せよう」

「りょうかいっ」

……ポトン。

…と舞はゆで卵をそのまま乗せた。カラもむかずに。

「これでよしっ」

「ちょっとまて！よしなのか！？これでホントによしとするのか舞は！？」

「うん」

……前言撤回、料理には見た目も大事だというので。舞にはまだまだ教えることが山ほどありそうだ。

「お兄ちゃん、そろそろ五分だったんじゃない？」

「あっ、そうだった。」

火を止めてっと。

……え？ゆで卵はどうするのかって？

舞が

「よし」といったのでこのままにしときます。佐樹はどんなリアクションとるのか楽しみだしね。

「よし。盛り付けは佐樹が来てからにするとして、……お疲れ様だったね、舞。」

「佐樹お姉ちゃん喜んでくれるかな―？」

「喜ぶさ。…たとえ人参が妙な形してても。…サラダにカラさえむいてないゆで卵がドーンとおいてあっても。……舞が一生懸命手伝ってくれたんだもんな。」

「うん！」

喜ぶ……よな？

～１０分後～

「……ガラッ」

「おっ？来たかな？」

玄関へ行ってみるとやっぱり佐樹が来ていた。

「いらっしゃ……」

「カレー（のにおい）だ！」

……最初に言うことがそれなのか！？

「いらっしゃーい、佐樹お姉ちゃん。」

「お、舞！久しぶりだねー！元気？」

「うん！」

「…佐樹こそ部活してきたのに元気そうだよね」

「まぁ今日の練習は千メートル３本と２００を１０本走ったぐらいだったからね」

……十分きつそうだが。僕がやったらダウンする自信あるよ。

「そんなことよりも、今日はこれが楽しみだったから元気なの！」

「あ、そうだった。ごめん、今準備するから。……舞、手伝ってー」

「はーい。……佐樹お姉ちゃんは座っててね。」

「はーい」

「「「いただきまーす」」」

「今日はね、舞もお手伝いしたんだよ」
「へぇー、すごい。えらいよ、舞」
「えへへ―」
佐樹は舞をほめながら、最初にゆで卵のカラをむいている。
……佐樹さん。そこはスルーするのですか？
「うん、カレー美味しい！さすが佑樹だね」
「あ、ありがとう」
「やっぱり佑樹は将来……」
……それはもういいって！！
「お店開いたほうがいいよ」
「そっちか！！」
佐樹はカレーに入っていた不格好な人参を発見し、……食べた。
…そこもスルーですか。
「…ところで佑樹、」
「何？」
「あのさ、」

「うん」

「今日泊まってっていい？」

「ぶっ！？」

…カレーを吐き出すとこだった。

「お父さんとお母さん今晩は帰るのがさらに遅くなるみたいだから……ねっ。お願い、久しぶりに一緒に寝よ？」

「わーい、久しぶりに佐樹お姉ちゃんと寝れる―」

「ちょっと待って！舞。まだ決まってない！」

「「ダメなの？？」」

「う、……ダメじゃないけど……」

佐樹が最後にうちに泊まったのは3年以上前だから、少し考えさせられるのはしょうがないことで……

だって一応僕は男で、佐樹は女の子だし……うーん…。

「「じゃあいいんだねっ」」

「え、えーと……」

「「ねっ！」」

なんでそんなに息ぴったりなの君タチ？

……ふぅ。まぁいいか、僕が気にしなければすむ話だ。

「わかった…いいよ。」

「「やった――！」」

さて、どうするか。

父さんと母さんは今週中は帰ってこれないから布団はそれを使ったもらおう。

「さ、今はカレーを食べよう。おかわりあるからね。」

「「はーいっ」」

――――――――――――

「「「ごちそうさまでした―」」」

「2人ともいっぱいたべたな―」

鍋がすっからかんになっちゃったよ。

よっぽどお腹空いてたんだな。

「「お腹いっぱい―」」

「はいはい、後片付けするよ―。…あ、佐樹。今日お風呂はどうする？」

「あ。どうしよう」

「今から帰って佐樹だけ入るのに風呂おろすのは大変だし……佐樹さえよければうちで入る？」

「佐樹お姉ちゃん、舞と一緒に入ろー」

「…うん。じゃあお言葉に甘えて」

「じゃあ今の間に着替えとか、他に必要なの持ってくれば？後片付け僕らでやるから」

「ううん、後片付けぐらいは手伝うよ」

「そっか。じゃあ3人でちゃっちゃと終わらせちゃおう。」

「じゃ、ちょっと行ってくるね。」

「「行ってらっしゃい」」

佐樹は必要なものをとりにいったん家に帰った。

ふぅ。……それにしても佐樹がうちに泊まるなんて、ホントに久しぶりだなー。

てゆうか僕らもう中学生なのに……

これで舞がいなかったら絶対拒否してるよ。

「お姉ちゃんとねるの楽しみー」

……でも、こうして舞も喜んでるわけだし、僕もあまり気にせずいつも通りにいこう。

……あれ！？またまたつづくのですか！？

6：晩ごはん（後書き）

はい。この1日はあと1話だけ続きます。

次は佐樹の視点で書くつもりです。……ちょっと難しいかもしれないですけど（^^；；

7：ホントのきょうだいのように（前書き）

初の佑樹以外の視点での話です。難しくて時間がかかってしまいました。

7：ホントのきょうだいのように

こんばんは。佐樹です。
今日は佑樹の家にお泊まりするということで、
今は着替えやらなにやらをとりにいったん家に戻っています。
「えーっと、パジャマと歯ブラシは持った。あとは……明日すぐ学校行けるように準備しとこう。」
カバンの中を整理し、明日の時間割を見る。
「…あっ、明日英語あるじゃん」
私って英語苦手だから予習ちゃんとやっておかないと授業についていけないんだよね。
今日のイングリッシュタイムも吉田先生のしゃべってること全然わからなかったし……
「よし、じゃあ英語の道具も持っていって佑樹に教えてもらおっと。」
……よし、準備オッケー。
じゃあカギをいったん閉めてと……
「よし、出発っ」

…たたたたたたっ。

「到着っ」

向かいなので五秒もかからない。

「「おかえりー」」

「うん、ただいま」

「佐樹、もうお風呂おりてるよ。舞と一緒に入ったげて」

「行こっ、佐樹お姉ちゃん。」

「うん、ありがと。……あ、佑樹、」

「何？」

「のぞかないでよ？」

「ぶっ！？」

……あらあら、顔赤くなっちゃって。

「のぞくわけないだろ！！」

佑樹も男の子なんだなー。

小学校低学年ぐらいの時は一緒にお風呂入ったこともあったんだけどね。

ーーーーーーーーーーーーーー

……どうも、佑樹です。

「「あはははははは―」」

風呂場からは舞と佐樹の楽しそうな声が聞こえてくる。

僕は何をしているかというと、茶の間でニュースをみている。

いつもは洗濯をしている時間なのだが、今はちょっと風呂場に近づけないので。

「それにしてもひどいよな、佐樹は。あんなこと言って僕をからかって。」

……ふぅ。

さて、僕も明日の準備でもしとくか。

ーーーーーーーーーーーーーー

またまた佐樹です。

「ふぅー楽しかった―」

今お風呂を上がったところ。

舞と洗い合いっこして、私も楽しかった―。

「さ、体ふいて。」

舞の体をバスタオルでふいてあげる。
少し大きめのそれは小さな舞の体を全部包み込んだ。
「もふもふ―」
「あはは。舞、なんかお化けみたいだよー」
さ、私も体をふいて、パジャマを着て、っと。
「佑樹―、あがったよ。ありがとう」
茶の間に入る。
「うん。じゃあ僕も入ってくるよ」「「行ってらっしゃ―い」」
さ。佑樹があがるまで英語の予習をちょっとしとこうかな。
「舞は今日、宿題ないの？」
「あるよっ。いつもはお兄ちゃんがべんきょうしてる時いっしょにやるの」
「そっか。じゃあ今日は私と一緒にやらない？まあ佑樹もすぐ上がってくると思うけど」
「うん、やる！」
舞はランドセルから計算ドリルを取り出した。

その細長いドリル、懐かしいなぁ。

〜10分後〜

「ふぅー。あがったよー」

「や、佑樹、おかえり」

「ん、もう勉強してるのか。」

「そう、英語の予習。それより、佑樹―、なかなか訳せない文があるの。教えてくれない？」

「うん、いいよ。えーと、これは……」

佑樹は英語だけは得意なので、苦手な私にとっては頼りになるよ。

「……ということ。わかった……かな？、説明下手だったけど」

「ううん、わかりやすかった。ありがとー」

「カリカリ……うーん」

「お、舞も頑張ってるね。じゃ僕も苦手な数学を克服すべく、勉強しますか―」

逆に佑樹は数学がすごーく苦手。

ちなみに私は数学はそれなりにできるので、佑樹によく聞かれる。

これでお互い様。２人で教えあって今までのテストは乗り切ってきている。

「カリカリ……」

……やっぱり一緒に勉強する相手がいるとはかどるね。

ーーーーーーーーーーーーーー

「よし、終わりっ」

「舞も終わったー」

「うん、僕もこんなとこかな。」

今は９時。お勉強タイムはこれで終了。

「そろそろ布団しいて寝る準備しよっか」

「はーい」

「……よいしょっ」

佑樹は私の寝る布団を持ってきてくれた。

「ありがとー」

「よいしょ、よいしょっ」

舞も頑張って布団を抱きかかえてはこんでいる。

布団の方が体より大きいので前が見えてない。

……大丈夫なの？

「……ボフッ」

あ、そのまま前に倒れた。

「今日もちゃんとしけたー」

「うん、前が見えないのによくいつもジャストでしけるよね、舞は」

……いつものことなのね。

「ところで、舞はいつも何時に寝てるの？」

「えーと、９時半、遅くとも１０時には寝てるよ。」

「じゃあ、寝るまで少し何かして遊ぼーよ」

「おっけー。じゃトランプでもやろう」

「やるやるー」

――――――――――――――――

それから私たちは、ばばぬきやしんけいすいじゃくなど、舞にもわかる簡単なトランプ遊びをした。

「あ、そろそろ１０時になるね」

「ねむーい」

舞が眠たそうに目をこする。

「じゃあそろそろ終わって寝よっか。舞、歯磨きするよ」

「はーい」

とととととっ

「あ、わたしもっ」

さっき家から持ってきていた歯磨きを出してついていく。

「しゃかしゃか……」

舞はほんとに眠たそうで、目は半開きのまま歯を磨いている。

やっぱり小学二年じゃ夜更かしは無理なんだね。

「あ、しまった。歯磨き粉は持ってきてなかったよ」

「あぁ、じゃあこれ使って。」

「うん、ありがと。」

「しゃかしゃか……」

しかし佑樹も眠そうな顔してるなー。

こいつはいまだに夜更かしはできないタイプだね。
…今日も寝付くのめちゃくちゃ早いんだろうな―。
泊まりに来るといっつも2人とも早く寝ちゃって、わたしだけ寂しい思いするんだよね。

―――――――――――――――

「よし、寝よう。舞、明日の準備は大丈夫？」
「うん。明日は入学式だから勉強はないの。」
「そうだったね。じゃあ電気消すよ。」
わたしと舞が布団に入る。
「「いいよ―」」
「…カチッ」
電気が消える。
「おやすみなさ～い」
「おやすみ～」
「うん、おやすみ」

佑樹も布団に入った。

さぁ、5、4、3、2、1、

「すぴー……」

「すー―、すー……」

「……はぁ。」

もう寝たよ。相変わらず早いね、この兄妹は。

こういう時って、

「わたしをおいていくなよぅ」みたいな感じになるよね。

はぁ、わたしも寝付きが早くなりたいな。

いや、別に遅いわけじゃないんだよ？ただこの人たちが早すぎるからそう感じるだけで……

「……うん、寝よう」

……実際、わたしは佑樹の家に来た時の方が、よく眠れる。

何でだろ。なんか安心するっていうか、……いや、逆にこっちが普通で、1人で寝る方が寂しいから……？

わたしも……きょうだいが欲しいな。

そしたら、今日みたいに、一緒に楽しくご飯食べて、お風呂はいって、

勉強は早く終わらせて、あとは寝るまで遊んで……

……そして、一緒にぐっすり寝て。

毎日がどんなに楽しくなることか。

「……やっぱり、1人は寂しいよ……」

なんだか急に少し悲しくなり、独り言をつぶやいた、……その時。

「……いつでも来ていいんだよ、佐樹。」

佑樹の優しい声が聞こえた。

「……！！！、、、佑樹、起きてたの！？」

「……

「今度は先にねちゃダメだよ」って言ったのは、佐樹じゃないか」

……あ。前最後に泊まった日の朝、そんなこと言ったっけ。

「それに、佐樹はいつ頃寝るのかな—と思ったから、寝たふりしてたんだよ」

「そう…」

「そんなことより、いつでも来ていいんだよ、佐樹。僕と舞は佐樹のこと、本当のきょうだいだと思ってる。」

!……嬉しい。

「だから、佐樹が家に1人で寂しい思いをしてることがわかった以上、ほっとくわけにはいかないよ。」

「……ありがとう、佑樹……」

「まぁ、ただでさえ寂しがり屋の僕が一人っ子だったら、孤独死してるかもだしね」

「はは、それ言えてる」

「さぁ、僕の眠気もそろそろヤバいし、早く寝よう」

「うん、おやすみ」

「すー、すー……」

……あ、もう寝たなこりゃ。

よっぽど眠いのを我慢してたんだ。

大人なんだか、子どもなんだかわかんないね、この子は。

「……おやすみ、佑樹。」

わたしはその後、佑樹の優しさにふれて安心したのか、すぐに眠れた。

ありがとう、佑樹、舞。

でも、そんなに甘えてばかりはいれない。

だから、本当に寂しくなったとき……その時はまた、よろしくね。

7：ホントのきょうだいのように（後書き）

僕には兄弟がいますが、もしいなかったとしたらと考えると、ゾッとします。

……だって、絶対寂しいじゃないですか。

もしわたしが結婚したとしたら子どもは絶対2人以上ですよ！（↑気が早い）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0441h/

佐久良家の日常

2010年10月28日07時54分発行